

---

## 関保之助と明治41年の遊就館整理事業

静岡県立美術館 村上 敬  
MURAKAMI Takashi

---

平成18年度、島根県立石見美術館、和歌山県立近代美術館、静岡県立美術館の3会場を巡回する美術展「森鷗外と美術」が開催された。発表者は担当者の一人として、鷗外森林太郎とミュージアムとの関わりをモチーフにした論文<sup>1</sup>を同展図録に執筆した。ここで発表者は、森林太郎が整理委員長を務めた靖国神社附属遊就館整理事業(明治41年)を取り上げ、「靖国神社の絵馬堂」であった遊就館が「軍事博物館・遊就館」へと変貌していく様子を紹介した。また、発表者はこの調査のさなか、整理委員の一人であった関保之助が起草した遊就館整理事業に関する意見書(以下「意見書」)を発見したが、この文書については平成18年度末に所属機関の紀要にて紹介する予定である<sup>2</sup>。

本発表は、これらの成果を踏まえ、遊就館整理事業において関が果たした役割、そしてこの事業が日本のミュージアム政策黎明期において果たした美術史上の意義を、「意見書」を手がかりに考察しようとするものである。

さて、「意見書」では、まず遊就館整理事業のきっかけが説明され、続いて軍事博物館一般の趣旨や目的についての考察が行われる。さらに、資料の分類項目案が詳細に示され、収集の方針や出品者への対応についても言及される。来館者に関わる点としては、分かりやすい展示や題籤、普及事業等について複数の具体的提案がなされている。また、館員に求められる資質や遊就館類似施設の全国展開など運営上のアイデアも示され、ミュージアム運営についてかなり具体的な考察が行われていることが感じられる。

上記のとおり、「意見書」は、遊就館をミュージアムとして生まれ変わらせようとした関の思考の跡をたどる生々しいドキュメントであるが、これらのプランが帝室博物館の現場を知る関から出てきたという点、「意見書」が森林太郎、寺内正毅という遊就館整理事業の責任者の目に触れたという点においても重要度は高いといえる。結論として本発表では関を遊就館整理事業の実質的推進者として位置づけることになる。

なお、関保之助(明治元年～昭和20年)は東京美術学校出身の有職故実学者。日本における武器や武装、装束の専門家として主に帝室博物館美術部で活躍、コレクターとしては東都において小堀鞆音に並ぶ存在であったと伝えられている。著書は僅少で、講演や談話で自説を開陳することが多かったらしい。昭和20年5月、東京千駄ヶ谷の自宅にて戦災死。

---

<sup>1</sup> 「鷗外とミュージアム 遊就館整理事業をめぐって」『「森鷗外と美術」展図録』平成18年 所収

<sup>2</sup> 「防衛省防衛研究所図書館所蔵「関保之助意見書」について」、『静岡県立美術館紀要』第22号 平成19年3月発刊予定